

第51回「瀧川家代々記録」にみえる新屋（あたらしや）の一面

(1)新屋の役割-御用宿-

新屋（瀧川家）は江戸時代、末次本町に屋敷を構えた松江藩の御用商人です。史料は檀那寺である信楽寺と、現在は松江から離れておられる子孫の方が一部所持しておられます。瀧川家の史料の多くは時代の変遷の中で失われたと思われませんが、松江の町人や城下町に関する史料が殆ど残されていないなか、大変貴重な史料です。「公用控」（瀧川家の公務日記）や、松江市指定文化財「大保恵日記」（新屋分家手代太助の日記）など、とくに重要な史料は、ふるさと文庫（※1）や『松江市史』（※2）、歴史館での展示などで、皆様の目に触れる機会が多くなってきました。新屋というと末次町の役人、木実方や人參方の経営などで知られていますが、今回は新屋が松江藩の中で格別であったことを示す別の一面について取り上げたいと思います。

ご子孫の方が所持しておられる史料の中に、13代当主寿一郎氏によってまとめられた「瀧川家代々記録」という史料があります。内容は「公用控」をダイジェスト的にまとめたもので、歴代当主の役職や来歴を簡条書きに記したものです。これを見ると、とくに御用宿（藩の宿泊施設）を勤めた記録や、藩主とその家族の接待について多く記されています。それだけ重要かつ特別な仕事として自負されていたのでしょう。

御用宿については「公用控」にも詳細に記してあるのですが、幕府巡見使、支藩の広瀬藩主や他藩の使者、京都・大坂の金融業者、医者などが宿泊しています。6代目伝右衛門くらいまで、松江藩と取引のある京都両替善右衛門、大坂御蔵元泉屋、天王寺屋五兵衛などがたびたび宿泊していた記事が見えます。「公用控」には京都両替善右衛門への接待が詳細に記されていますが、善右衛門滞在中は瀧川家へ藩の御台所衆が毎日来て二汁五菜を出し、鯉鮒、鴨、鶯、御紋の羽織などを贈り、見送りには手代を安来まで使わし酒を持たせる、という丁寧な接待をしていました。銀主の接待は藩にとっても重要な仕事であり、このような松江藩の要人を宿泊させる事ができるような屋敷構えやしつらえ、雇い人を揃えるということは、かなりの有力商人だったと想像されます。

【↓「松江四季眺望之図」新屋付近】



(2)藩主の「御成」

このような豪邸でしたので、藩主やその家族もたびたび訪問して様々な行事や交流を楽しんでいたようです。「瀧川家代々記録」では、こうした藩主の訪問を「御成（おなり）」と呼ぶことについて、「今昔物語」（これも13代当主がまとめた歴代の記録）に以下のように記しています。

「毎年夏に末次本町裏で花火があり、花火御覧の為、瀧川灘座敷に藩主の御成がある。夕刻より夜半頃まで花火御覧の上、御帰殿になる。この時はすべて御台所役人が出張の上料理する。御膳の

あと茶を献ずる前例で、瀧川が亭主となり茶を点てる。「藩主御成」というのは御家老・御中老の家までを指し、それ以外は「御立寄」とか「御腰懸け」と言い、表向きに「御成」と言うのは珍しい例である。御成の時には御紋上下に金千疋を家内へ拝領する例となっている。御茶を献ずる事があるため、茶点前の稽古をしており、殊に不味君の御時代には茶席にお越しになる事もあった。故に茶道頭の藤井長左様方へ毎月茶の稽古に出向き、ついには真台子の点前まで皆伝を受けた。」

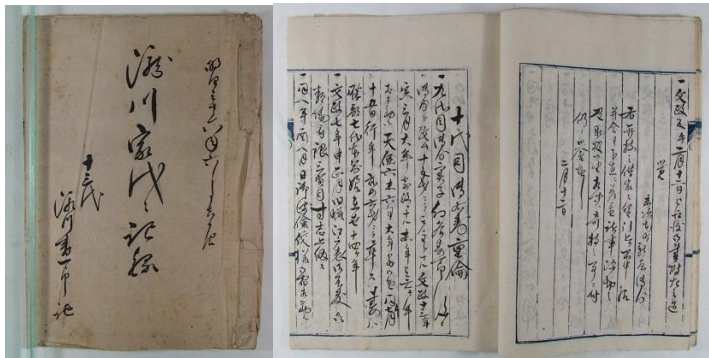
新屋が武家と並ぶ特別な扱いを受けていたことが分かります。新屋への御成は花火以外にも様々あり、3代藩主綱近による御祭駕行列見物、6代藩主宗行による嫁嶋遊覧や白魚漁見物、生蠟絞り場見物というのも見えます。9代藩主齊貴の花火御覧の記事は4回も見えます（※4）

(3)藩主と新屋の文化交流

茶の献上はそのつど行っていたようですが、6代目伝右衛門の時、宗衍に台天目にて茶を献じ、別の年には茶道具のご称美もありました。8代目伝右衛門の時には治郷（不味）が「伝右衛門の茶点前をご覧になりたく思し召し、台天目の点前をご覧になった」とあります。文化2年に松慶（8代目伝右衛門隠居）が不味より「湖月亭」の額字、自筆色紙と茶杓を拝領したとあります。この松慶氏は特に茶に関して藩主と交流があり、有沢隼人（家老）宅にての茶会に客の一人として参加したり、斉恒の花火御覧の後に茶を献じ、その際大円庵（不味）様・月潭院（斉恒）様へ御茶を差し上げた事を褒められ、当年78歳になると申し上げると長寿を喜ばれ御紋上下を拝領した、とあります。

お茶のほかにも、瀧川家が担った文化的役割のひとつに御囃子（面を付けず舞、謡、お囃子などで能の曲の一部を演じること）がありました(※3)。松江藩では松囃子（御囃子で新年を祝う行事）の慣例がありましたが、新屋は町人で組織する御囃子連中の中心となり、練習場にもなっていました。11代伝右衛門の時は10代藩主定安より御囃子のお相手を仰せつけられたり、能面を献上して褒美を拝領するなどの記事が見えます。松江藩は能楽もさかんに行われていたようで、新屋はその一端を担う重要な役割をもっていました。

このように茶湯や能などの修練、藩主との交流などから、新屋の文化的教養の高さをうかがい知ることができます。江戸時代には瀧川家のような豪商・豪商が各町や村に存在し、松江藩はそのような家に支えられていたといってもよいでしょう。また、豪商豪農たちもそれを自負しており、経済的のみならず、文化・教養の面でも重要な存在でありました。



【「龍川家代々記録」】

(平成 27 年 12 月 24 日 / 史料編纂室和田美幸)

〔参考文献〕

- (※1)松原祥子著「松江城下に生きる-新屋太助の日記を読み解く-」 (2010.3)
- (※2)『松江市史史料編 7 近世 3』 (2015.3) (『松江市誌』 (昭和 16 年) 編纂時の筆写本を翻刻掲載)
- (※3) 小林准士『山陰研究ブックレット No.3 松江城下の町人と能楽』 (2014.3) (外部サイト)
- (※4)松江市史講座 (平成 25 年 9 月の渡辺浩一先生)。藩主の親水遊興、領民との交流について触れられました。